
ボーダレス・レイン

いかれ帽子屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボーダレス・レイン

【Nコード】

N6175Y

【作者名】

いかれ帽子屋

【あらすじ】

人は皆、自分だけの部屋を持っていてそれを心と呼ぶ。部屋が押しつぶされたとき、死ぬのだから。各務と智世は猫を介して次第に互いの境界線に迫っていく。近すぎる距離間は怖く、かと言って扉を隔ててでは温もりも伝わりやしない。ふたりのボーダーラインを越えて降り注ぐ雨とレイン・メイカーの物語・大学二年生の夏に部誌に載せた小説です。やっと載せることができました

ボーダレス・レイン？

自分と他人の境界は痛みである。教授がスクリーンに映し出された画像をパソコンでいじりながら言った。痛いところが自分の体の国境で、その国境線を全部つなぐと自分の体のラインが現れるという。

なら、その国境を越えられたら二つのものは一つになるのだろうか。隣で安らかな寝息を立てる野村智世を見やる。各務は彼女の輪郭をきれいだと思った。

哲学の授業が終わると大学を出て駅に向う。駅までは少し遠いけれど余裕があったので、たまには悪くない。

しばらくして追いついた智世に声をかけられた。お互い、挨拶のようにお疲れという言葉を使う。

「確か、まだ講義あるよね。なんでもう帰るの？ 休講だったとか」「知り合いの女の人に掃除の手伝いを頼まれてね、一泊しても良いんだって」

どうやら家に泊まらせても問題はない男子と思われたらしいと各務は苦笑する。

「いつも傘持つてるよね」

「チャールズ・ハットフィールドが仕事でもしないかぎり、雨は気まぐれだから」

誰？ と智世は首を傾げる。

「百年以上も前に人口的に雨を降らせることに成功した人」

横目で彼女の反応をうかがうと各務は続けた。

「その技術は高い成功率を誇り、頼まれて雨を降らせる『レイン・メイカー』という仕事を始めるんだ」

「きつと話題になっただろうね。『雨のご注文、承ります』ハットフィールド」

「けれど、一九一六年に依頼で降らせたサンディエゴの雨は止まな

なくなってしまった。降らせる方法は知っていても、止ませる方法を知らなかった。一ヶ月降り続いた雨は三つのダムを決壊させ、洪水を起こした。彼は洪水を起こした張本人として訴えられて以降、雨を降らせることはしなかった」

「裁判で有罪になって禁止されたの？」

「科学的に降らせたものではなく偶発的におきた自然災害とされて彼は無罪だった。けれどハットフィールドが何よりショックだったのは自分の技術を法的に否定されたことだったんだ」

「やっぱり雨は気まぐれじゃないと。そういえば、雨と晴の境界って見たことある？」

何のことを言っているのか、よくわからず各務は何も答えなかった。

猫と雨はどこか似ている。申し訳程度のすべり台が備わっている小さな公園があった。そこに三毛の仔猫。首輪も付いている。

餌をあげようと智世はポケットや鞆をあさるが何も出てこない。

「また今度にしたら？」

「そうする」

ボーダレス・レイン？

電車を乗り継ぎ、ヒロミと待ち合わせていた駅に着く。大塚も来ていた。久し振り逢ったこともあり、近況を語り合う。

ヒロミはすこしだけ時間に遅れてきた。彼女の言葉づかいが少し幼いことに違和感を覚える。

連れられていった先は高層マンションだった。つい見上げてしまう。城を思わせる建物に月がよく映える。

住まいは最上階にあった。招き入れられて、リビングに足を踏み入れた時、この人は寂しかったんだと感じた。部屋はクッションを中心に散らかっている。きっと彼女は普段そこに座り、生活に必要なものを手の届くところに円を描く形で配したのだろう。そこが彼女の手に負える、必要とする最低限のボーダラインだったのだ。

独りで暮らすには、あまりに家は広過ぎた。片付けをし、ゴミを捨ててゴミ箱の内側にこびり付いたものも丹念に洗い流す。三人は笑いながらそれらをこなした。

一段落ついてヒロミがひっぱり出してきたのは三つの人形である。装飾のついたウサギをヒロミが、愛嬌のあるオウムを大塚が、各務は血まみれの爪をした黒猫を手にとった。

それぞれの個性にあったのをとったよね、とヒロミが快活に、各務は違いないとシニカルに笑う。

その夜、三人は並んで床に就いた。

知らない猫が目の前で死んでいく。何かしらの処置を施すわけではなく、各務は傍らで見つめる。

最初はビニール袋が風に舞っているようにしか見えなかったが、それは轢かれた猫のものが苦しむ様であった。壮絶な痛みが波紋状に散った血から伺い知れる。

しばらくして猫はのた打ち回るのを止めて横たわる。そこから死

までの行程を、命が内側に向けて縮まっていくと考える。手足から徐々に動かせなくなり、心臓と脳まで達した時に死は訪れるのだ、と。

眼が合う。何か言いたげだったが、最期に一息吐くと猫は死んだ。車道と歩道の境界にしゃがみ、各務はまだ温かい猫の体を撫でる。どんなに親しい娼婦より死は近い。

ボーダレス・レイン？

バスの吊革につかまって、隣の男性が広げる新聞を盗み見る。近々、獅子座流星群が見られるらしいということが書いてあった。

男性がめくった先で一枚の写真に見入る。雨の中、国境を隔てて向き合う二人の兵士のこう着状態が写し出されていた。しかし空まで分かつことは出来ない。境界線を越えて広がる雨雲の下で、彼らは同じ雨に打たれている。

国境なんて、雨には関係ない。そう思えた。

窓の外に智世の姿が見える。彼女は猫に餌をやっていた。バスはすぐに通り過ぎてしまふ。もう彼女の姿はおるか、公園すら見えな

い。

男性がまた一枚、ページをめくる。

古い友人が自殺した。遺書はとうとう見つからなかったようだ。

授業をギリギリまで受けるつもりで大学に喪服で登校した。各務の口元には普段と変わらない笑みが浮かんでいる。

いきさつを話すと智世は猫が目の前で死んでいく切なさややるせなさを語ったが、いたたまれないと表現された感情を理解出来ずにいる。

各務は考えることはする。しかし感じることに乏しかった。表情はあるが、感情の欠如は否めないという風に。智世はそこに多少なり苛立ちを覚えた。その日、智世は各務とすこし距離を置いて過ごした。うとまれることには慣れていると彼は肩をすくめる。

斎場は雨に濡れていた。参列者が口ぐちに綺麗な死に顔だと言うことに反発を覚える。生前を知っているのに彼らが何故そんなことを言うのかわからない。

高校の後輩を見つけ、自分が泣いているか確かめた。すると彼女は数ミリの指の隙間で示す。友人を亡くしても、その程度の感情の

振れ幅しかないことを各務は申し訳ないと思った。

まだ死が理解できない子に連れ添った母親が、星になったのだと語っている。馬鹿げてると思いながら、会場にあった椅子を棺の傍に寄せて腰掛ける。一晚中眠ることなく遺体に沿うつもりでいた。各務なりのせめてもの追悼だった。

実父が奥の会食にいるのを見かけたが話すことはなかった。

以前、人を好きになるようには見えないと言われたことがある。

そんなことはないと言論も出来たが、理解されないだろうと彼はしなかった。自分は人から好かれる側の人間ではないと各務は考える。だから人を嫌うことは滅多になかった。ただ、人に近付き過ぎることをしなかった。逢えば楽しく話す。けれど愛着を持たない。ショーが終われば帰ってしまうサーカスの観客と同じように考えている。各務は自分を独りぼっちの道化師と表した。

火葬は快晴だった。焼き終えるまで皆、控え室にいるよう言われたが各務は傍を離れなかった。煙が立ち上る様子を誰より近くで見ている。

納骨後、食事が振る舞われたが早々と食べてしまい、斎場を当て所なく歩いた。積まれた遺品の中にあつた友人の写真を見つけ、手に取る。

写真は幼い頃から高校生までの数十枚のうちのほんの一部ではないだろう。けれどももう増えないのだ。笑顔の写真が一枚でもあるなら自殺なんてするなよ。各務は笑うしかない。

帰る間際に友人の父と母に声をかけられた。父親は肩を揉んでくれた。母親は一晩起きていたことを気にかけてくれた。息子が自殺して、それどころじゃないというのに。

各務は考える。両親が一番辛いのは彼が自殺したということではない。彼が自分達を頼ることもせず自ら命を絶ったという事実だと猫の死を思い出す。人もきつと、閉ざした心が何かに押しつぶされた時、死を選ぶのだ。

そして遺された人間は暗いものを全部一人で抱えて死んでいくこ

とがどれ程苦しいものか想像し、苛まれるのだろつ。想像の痛みに限界は無いのだから。

式場を出て駅に向かいながらそんなことを考えていて、各務は自分の異変に気付く。笑おうとするほどに、とめどなく涙はこぼれ落ちた。

笑い声の断片が誰の耳にも届かないようにと口元を押さえて歩いた。どうせなら、式の中で泣くべきだったと思いつながら。

ボックス席のシートに背を押しあてて、大塚と智世にメールを打つ。

自分にも感情はあつたらしいと。

ボーダレス・レイン？

高校時代の友人たち四人で酒を呑んだ夜。以前、八王子で吐いたことを理由に各務は飲酒を断ったが、他の面子は楽しそうに呑んでいる。

酔った勢いなのか、ヒロミが海に行きたいと言い始め、誰も反対しなかった。

浜辺には波が碎ける音だけが響いている。ヒロミは大塚の袖口を引っ張りながら歩き、もう一人の女性の先輩もそれに添う。きつと大塚ならヒロミを一人にはしないだろう。微笑ましい光景だと思いつつ各務は一步半ほど後ろを歩き、絶えず話しかけて三人を笑わせる。それが自分の役割だと弁えていた。

袖を離すと、棒きれを拾いあげたヒロミが砂浜に線を引き始める。間取りらしい。大小で部屋は五つあった。

真ん中はリビングで私の部屋はここ、といった調子でそれぞれに部屋を割り振る。

「こんな風にみんな一緒に住めたら良いのにね」

残念そうにつぶやき、彼女は他の部屋や設備を付け足していく。自分には離れを宛がってくれたら良いですという言葉を読み込んだ。仕切りは国境線のように見えた。皆、自分のどこかに個人部屋を有していて、人はそれを心と呼ぶのだろうと各務は思う。

空を見上げると三日月の傍らで星が光っていた。

段ボールを運んでいる。中には公園にいた猫の亡骸が入っていた。智世から猫がいなくなったと聞いていたが、それほど気にかけていなかった。気まぐれにふらつと住処を変えたのだろうと。

猫は使い古されたブランケットの切れ端のようになるまで轢かれて、道端に転がっていた。かろうじて見覚えのある首輪が見て取れる。

近くのスーパーマーケットから段ボールと新聞紙を調達して戻ると、足で遺骸を紙を敷き詰めた箱に押し込めた。よくもわからないけれど、以前は血が付くことも厭わなかったのに、今は猫の残骸に触れることをためらった。

電話をかける。三回目の呼び出し音の後、智世は出た。

「猫を見つけたよ。死んでたけど」

そう、とだけ彼女は言う。

「正直、野村さんに見せたいものじゃないんだ。君が構わないなら僕の方で」

「悪いんだけど、私の家まで持ってきてくれるかな」

ボーダレス・レイン？

ヒロミの住む高層マンションほどではないが、なかなかの物件だった。

エレベーターは使わず外階段でのぼり、部屋の前に段ボールを置くと呼び鈴を鳴らす。智世は片付けがあるからちよつと待ってとドア越しに言った。それが片付けではないことくらい各務にもわかる。ドアに寄りかかり、自分の部屋を思い浮かべる。入居時から備わっていたベッドと机、持ち込んだ本以外特筆すべきものが何も無い、寂しい個人部屋。

父親に家を追い出され、ずぶ濡れになって近くのコンビニに入った時、中学時代の知人の弟とその母親に出逢った。言われて初めて肩から出血していることに気付く。笑いながらわけを話すと彼らは、私たちは各務君の味方だからと言い、談笑のあと満足そうに立ち去った。一つの傘におさまった二人の背中を見送りながら、自分が渴いていることを、いつそう感じる。

雨を望んでいた。しみるような雨を。

コトン、という微かな音が背でした。幅が厚いと温もりも伝わりやしない。各務は嘆息する。

「猫、駄目だったか。名前くらい付けてあげれば良かったな」

「名乗る猫にはまだ逢ったことがない。それに無い方が猫らしい」

「『吾輩は猫である。名前はまだない』」

「名前と言えば、日本ほど雨に名前を付けたがる国は無いらしい。知ってる？　今夜は雨なんだ」

「嘘だよ」

天気予報で雨の心配はないって言ったものと智世。

「雨は降る。ハットフィードに誓っていい」

傍らに段ボールを引き寄せる。彼は空に立ち上る土埃をヒントに雨を降らせる方法を開発した。けれど各務にはそんな技術は無い。

だからこれはただの追悼だ。

「ごめん。ドア、いま開けるね」

段ボールを抱えて、ドアの前から立ち退き、「入れてくれて、ありがとう」と小さく呟いて各務は部屋に入った。

ボックス席に座れたのは幸運だった。各務は窓際に、智世はその斜め向かいに座る。段ボールは彼女が抱えている。持とうかと聞いたが、智世は持ちたいからとことわった。潮騒が近付いてくる。

夜の浜辺でなるべく湿っていない流木を集めて小さなやぐらを組む。中心に猫を入れた箱があった。

最後に持ってきたオイルライターの油を満遍なく注ぎ、火を付ける。

亡骸が燃えていくのを二人は並んで座って眺めた。火の勢いは増し、火の粉を散らして少しずつ形は崩れていった。

「連れて帰ってあげられたら良かったのに」

頬を伝う涙を見て、今は思いつきり泣かせてあげようと思う。これはこれで雨に見えた。落ち着くまで気長に待っていれば良い。雨はやり過ぎなものなのだ。止まない雨は無いというけれど、雨の何がいけないというわけでもないのだから。

気持ちの整理が出来たら、きっと彼女なら自分で立てる筈だ、と炎だけを見つめていた。お前もそう思うだろ？　と言いたげに。

澄みきった夜空には雲ひとつ見当たらない。そろそろ頃合いだろうと各務は語り出す。

「灰は空にのぼり、気流に乗ってずっと遠くまで運ばれる」

智世は煙を目で追い、空に目線を移した。ピンで刺した穴から漏れるように、微かな光が散りばめられている。星は皆、ひとりぼっちなのだと思うた。

「そして雨と一緒に降り注ぎ、地面を潤す。いつか、きっと花が咲くだろう。本当にうまくいって出来た世界だ」

暗く果てしなく広がっていて、地平線と溶け合い境目さえもわか

らない。押しつぶされそうになる。そんな不安を煽るような奥行きのない空だった。

一筋の星が流れる。ひとりぼっちだった光たちが手を繋いでいくように、二つ三つとそれは続いて途中で数え切れなくなった。

「星になっただなんて信じられる？」

「なんてことはない、ライオンだって猫のうちだ」

無数の流れ星が雨のように降り注ぐ。

最終話

まだベルリンに壁があつた頃、東西を分かつ境界線上にチェックポイント・チャーリーという検問所があつたと各務はおもむろに話し始める。智世は真向いの席で聞いていた。

夜が明け、山沿いを走る電車の車窓をにわか雨が打ちつける。

「一人の青年がその近くの壁を越えようとして東ドイツの警備兵に撃たれて、有刺鉄線に絡まるように引つかかった。けれど誰も彼を助けることは出来なかった」

「境界線付近だったから」

各務はうなずく。青年の体はたった数メートル東側にあつたが為にアメリカ軍の兵士は救助が出来ず、西ドイツ警備兵も西側の兵士を刺激することを恐れて、近寄ることをためらつた。多くの目撃者を前にペーター・フエヒターは失血死した。

「同じように人は得てして、他人に近寄りすぎることを怖がる。近すぎる距離は誰かを傷つけるかも知れないし、傷つけられるかも知れない」

「なんだかヤマアラシのジレンマみたい」

「でも、ヤマアラシのジレンマは心理学的には紆余曲折を経て、両者にとってちょうど良い距離に気付くって意味になるらしいね。実際、ヤマアラシはジレンマの解消法をちゃんと見つけてる」

針の無い頭部を互いに寄せ合つて、彼らは温もりを確かめ合つた。

「僕は人に好かれる側の人間じゃないから関係ないけどね」

「でもわたしは各務君って、各務君が言うほど人にうとまれてると思わないけどな」

雨音は止み、頬に陽が射す。車窓が濡れているのが嘘のようだ。電車が後方に雨雲を置き去りにする。

ねえ、と智世が呼びかけた時には既に各務もその光景に見入って

いた。ようやく彼は理解した。

黒く重々しい雨雲と雲ひとつない晴天。相反する二つの空がくつきりと境目を作って分かれていた。けれど、ずっと遠くに幾筋かの光が雲から射しているのが見える。そこが雨の終わりのようだ。

空が描く、跨線橋を思わせる虹を二人は車窓から見えなくなるまで目で追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6175y/>

ボーダレス・レイン

2011年11月27日01時54分発行